なわてBOOKS【２０２１年7月号】

今回も恵文社一乗寺店の能邨さんが、この時期にオススメする３冊の素敵な絵本を選書してくださいましたので順にご紹介致します。

『てがみがきたな きしししし』　作：網代幸介/ミシマ社/2021 年刊行

一軒の古いお屋敷に郵便配達人が手紙を届けに来ました。入ってみるとそこは、不思議な生き物が暗がりにうごめく奇妙な館。一段一段階段を登る配達人に「てがみがきたな…」と不気味につぶやく異形のものたちが**どこかユーモラスで、ダークな中にも愛嬌のある独特の絵が魅力**です。暗がり絵本とでも呼びたくなるジャンルの本ですが、大人っぽい雰囲気と子どもも喜ばせる奇妙な味わいが漂っています。最後に手紙を受け取った主は…？ **終わり方も不思議**な絵本です。

『十円玉の話』　作：牧野伊三夫/あかね書房/2021 年刊行

パン屋のレジに入っていた１枚の十円玉。買い物客の手から手へ渡り、最後は辻ギター弾きの男性のポケットへ。**天下のまわり物であるお金の一日の動きがよくわかります**が、面白いのはそれを**十円玉の立場から語っている**ところでしょうか。そして描かれた人物や背景が、まるで戦後から昭和半ばまでの日本のどこかの街を舞台にしているかのような**絶妙な昔感と懐かしさ**。十円玉の物語を語るのにぴったりのノスタルジーあふれる雰囲気も独特のタッチの筆も、この作者ならではの世界が生きています。お金と人と街のお話です。

『ぼくのたび』　作：みやこしあきこ/ブロンズ新社/2018 年刊行

ホテルで働く「ぼく」の夢は、いつか自分自身が旅に出ること。その空想をふくらませながら日々を送っている彼の旅立ちはいつおとずれるのか…ひとつのところにずっといながらも、心は大空を舞い世界中を駆け巡ることができます。その**空想の場面がひたすら緻密に美しく描かれたページが素晴らしく**、「よるのかえりみち」と同じ作者の世界観が楽しめる一冊です。豊かな想像力はどんなものよりも強く誰よりも遠くにゆける、そんな思いがそっと伝わる作品です。

【なわて BOOKS】
毎月、京都の恵文社一乗寺店さんからなわて幼稚園の図書室に届く、スタッフがお薦めする最新の絵本や話題の絵本をご紹介しています。

【恵文社一乗寺店】
２０１０年にイギリスのガーディアン紙が発表した「世界でもっとも素晴らしい書店１０選」に日本から唯一選ばれた京都・一乗寺にある書店。

http://www.keibunsha-books.com/